

深草里ふかくさのみち〔ひがしは谷口山たにくちを限り、西は竹田里たけだ、南は墨染すみぞめ、北は稲荷いなりを限る、これ一箇の勝地にして、いにしへより

高貴の山莊寺院の大厦多し、殊に鶉の名所にして、古人の秀咏多し、事は前編に見へたり〕

新 古 思ひ入身はふか草の秋の露たのめし末や木枯の風 家 隆

続 古 深草ふかくさや誰古郷としらねどもむかし忘れぬ衣うつなり 土 御 門 院

〔此里の名産は、土器、風炉、其他土工の類、瓦師はひがしの山下にありて一村これを産業とす。又蕃椒の粉に、団はいにしへより此里の名物にして、世に名高し〕

道澄寺だうちようじ〔深草筋違橋ふかくさすぢかひばし北六丁目にあり。本尊地藏尊は行基ぎやうきの作にして、立像長五尺ばかり。いにしへは諸堂巍々たり。

此寺の鐘は今大和国栄山寺えいさんにあり、則当寺の銘を鑄る、予が著す大和名所図会に見へたり。此寺今律宗湛好法師りつしうたんかうほふしこれを守る〕

常安寺じやうあんじ〔同所にあり、浄土宗にして、本尊阿弥陀仏。又門外の南に小堂あり、十一面觀世音を安置す、行基ぎやうきの作な

り。又脇壇に元三大師自作の像、地藏尊、春日の作を安ず〕

石像五百羅漢

〔深草石峰寺後山にあり。中央釈迦牟尼仏、長六尺許の坐像にして、周に十六羅漢、五百の大弟子

圍繞し、釈尊靈鷲山に於て法を説給ふ体相なり。羅漢の像おのく長三尺許、いづれも雨露覆なし、近年安永の半より天明のはじめに至つて約莫成就す。花洛画工寂中老石面に図して指磨す〕

嘉祥寺

〔同所僧房村のひがし安樂行院の境内にあり。本尊は聖天尊を安置す、中興空心上人、安樂行院再建の時、

西の方竹林の内井中より掘出す、靈験いちじるくして常に詣人絶ず。いにしへは当寺の封境広大にして伽藍巍々たり、仁寿元年二月仁明天皇清涼殿を移され嘉祥寺とし給ふ由、文徳実録に見へたり。今此地に諸堂房舎の字の地多くあり、是みな嘉祥寺の旧蹟なり〕

仁明天皇陵

〔今詳ならず、帝陵御改記曰、深草安樂行院の内に一堂あり、是陵とも又御骨堂とも、あるひは深草

山法華堂の旧蹟ともいふ。文徳実録曰、嘉祥三年三月己亥、仁明帝清涼殿に崩す、時に皇太子殿を下て宜陽殿のひがしの庭の倚廬に御すと。云々。続日本紀、嘉祥三年三月廿一日癸卯、天皇を山城国紀伊郡深草山の陵に葬り、遺制にして葬を薄じ、綾羅錦繡の類など帛布を以てこれに代る、鼓吹方相の儀ことごとく停止に従ふと、云々〕

安楽行院御廟

〔同所堂前南向にあり、後陽成院、中和門院の御骨を収めらるゝ所なり。中和門院は後水尾院の御

母関白太政大臣晴嗣公の御女なり。帝陵記曰、後陽成院廟塔泉涌寺にあり、元和三年八月崩ず。云々〕

法華堂

〔いにしへ安楽行院にあり。当院のひがし真宗院の地旧跡なり。後世真宗院を建るに、かの院今の中門の所

に塚あり、是を壊掘の時、土中に六角の石棺あり、六枚の截石をならべ作るなり、今安楽行院にあり。法華堂は天子の

御骨を収めらるゝ所なり。後深草院、称光院、後土御門院、後柏原院、此四帝の御骨収めらるゝ事、皇代記、明応記、

二水記等に見へたり。御廟は泉涌寺にあり〕

八月ばかり、後深草の法華堂へはじめて参り侍りけるに、いまだふ

みなれぬ芝の下道を、はるくとわけ侍るに、御堂へ参りつきて、

あはれもかづく思ひやられて、おもひつゞける、

玉葉集

深草や露ふみわくる道すがら苔の袂ぞかつしほれゆく

入道前太政大臣